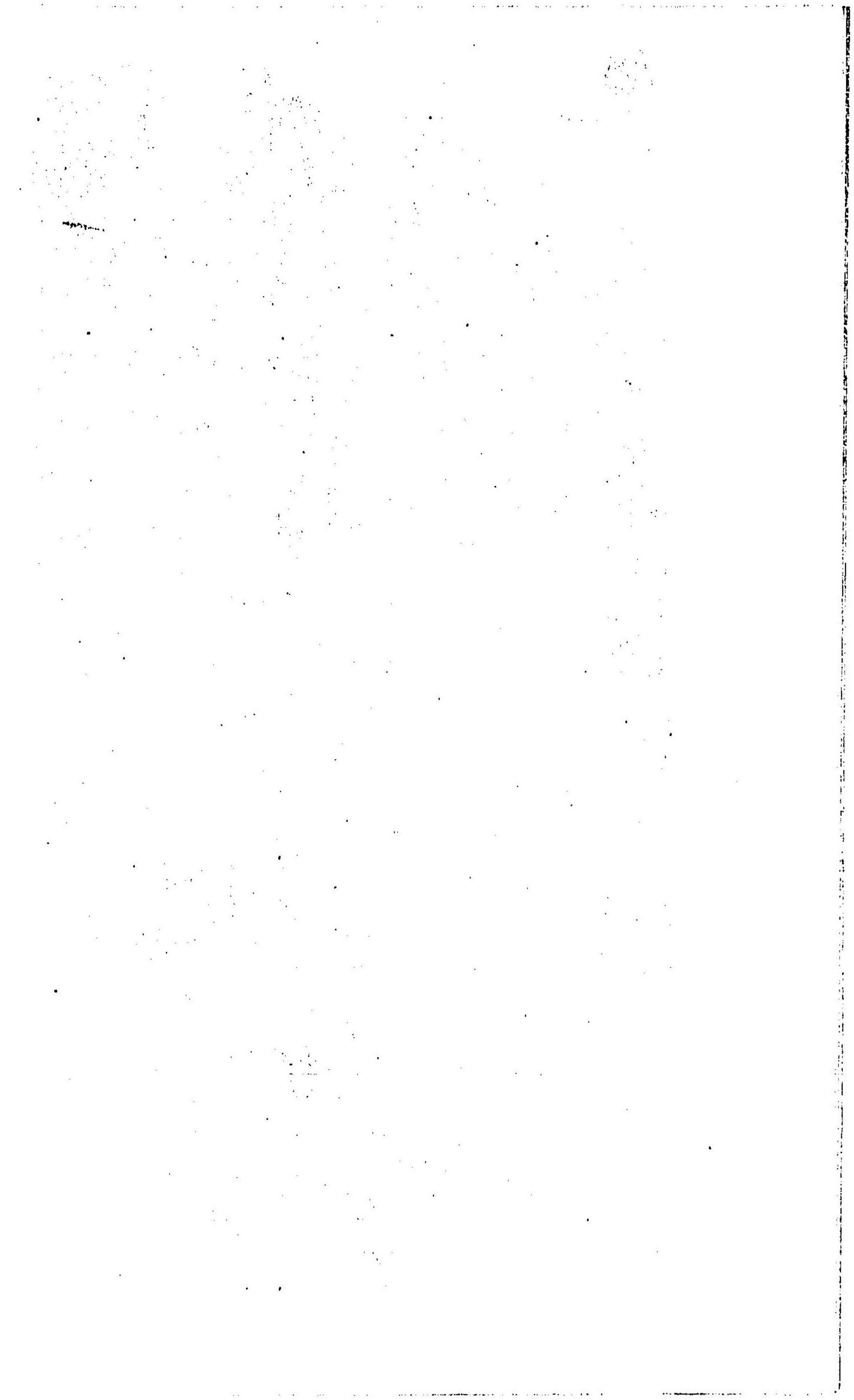




後漢楊君石門頌



後漢衡方碑

本	秋	孝	上	上
聲	世	長	昭	家
朱	郡	發	夷	于
化	碑	耳	殿	平
連	州	祥	之	陸
郡	果	誠	爾	如
圖	孝	隆	社	之
州	廟	于	碑	烈

君諱全字景完敦煌效  
 氏為秦漢之際曹衆矣  
 故煌枝然葉布所在為  
 夏陽令蜀郡西部都尉  
 不奉卑世是以位不割  
 亡之敬禮無遺闕是以

東晉王羲之書東生帖（西紀三七九年辛）

東生帖



日克二西  
生已  
生未  
生此  
生也



東晉王羲之書廿九日帖(西紀三八八年卒)

廿九日帖

廿九日帖  
白昨遂不奉  
恨深體中復  
弟甚頓  
勿不具

唯皇構遷中之允載為御  
以啟仁路歷商區輶屈衛  
躬矚荆棘荒朽工為緜蔓  
允亨敷五靈以扶德含剛  
咸則晝皎皎其何朗亨夜  
不知甲子終或已以貽戾

夫靈光弗曜大千懷永夜之  
 是以如來應群緣以顯迹爰  
 功靡作輔國將軍直閣將軍  
 開國子仇池揚大眼誕承  
 於弱年挺超群於始冠其  
 萬於一掌震英勇則九宇

北魏鄧道昭書碑文公解

事  
人  
時  
仁  
結  
義  
德  
績





大隋開府儀同三司龍山公墓  
 公諱質字弘道青州樂安人也  
 奢之苗裔隨官巴庸即此民復  
 死梁棧巴東達平二郡太守公  
 志性對發諒直淵深周朝授大  
 儀同領鄉團五百人守隘三碣大象



蓋以乾元資始卦玄象於穹隆坤德  
 談意欲濟於蒼生終不成於大造言  
 捨芥似澄水之晷月影若明鏡之寫  
 開成岑雉童於是長嗟宣尼所以興  
 文色鳥獸迴音理八酬之分身紛興  
 鼎落月搖星豈能敷聖教於華開布  
 天啓聖膺晷錄於千年下庶獲安仰  
 高祖文皇帝捐讓受終理形統象下

唐太宗皇帝書溫泉頌(西紀六四八年出)

雪晨林寒尚翠  
谷暖先春年序  
屢易暄涼幾積  
其妙難窮其神  
靡覲之迹

唐虞世南書孔子廟堂碑（西紀六三八年辛）

史若乃知幾其神惟睿作聖玄妙之  
進讓罕同靡不拜洛觀河齋符受命  
之錄遠跡肯史之傳而德侔覆載明  
踵千年之聖固天縱以挺質稟生德  
用祖述先聖憲章往哲夫其道也固  
微地維將絕周室大壞魯道日衰永  
從時義存於拯溺方且重反溥風一  
明商羊之興雨知來歲往一

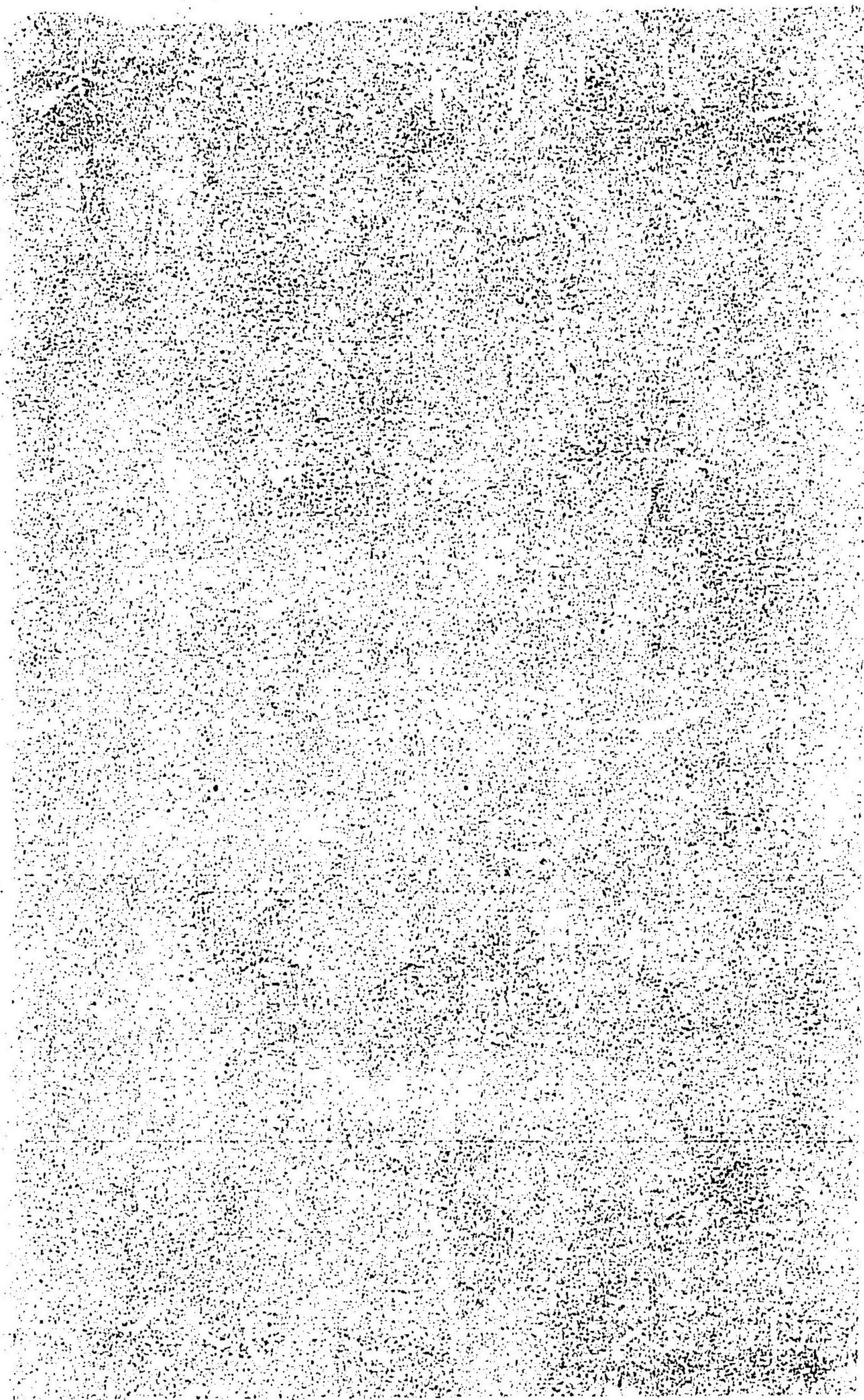
贊

隨柱曰：先有大夫，和表明公。皇  
夫素秋，肅艾。劫草標於疾風，對世  
其有蹈水火而不辭，臨鋒刃而莫  
下。愧里司徒，昨土於龍門。是以軍  
龍，將軍築川。月火潤朱擘，山方  
折。如延天正，瓜之延扶。搖始搏旱  
前，已中節。巢高山之秀，氣作繁蕭。

大唐太宗文皇帝製三藏  
蓋聞二儀有象顯覆載以含  
其數然而天地苞乎陰陽而  
不惑形潛莫覩在智猶迷况  
則弥於宇宙細之則攝於豪  
法流湛寂提之莫測其源故  
庭而皎夢照東域而流慈昔

唐張旭書肚痛帖

肚痛之帖  
心作熱  
後



粵妙法蓮華諸佛之祕藏也多寶  
諸佛覺而有娠是生龍象之徵無  
自誓出家禮藏探經法華在手宿  
城而可息爾後因靜夜持誦至多  
滿六年摺建茲塔既而許王瓘及  
水發源龍興流注千福清澄泛灑  
卅泛表於慈航塔現兆於有成燈  
三乃用壯禪師每夜於築階所懇



唐柳公權書玄秘塔碑（西紀八六五年卒）

玄秘塔者大法師端  
如來以闡教利生捨  
即出囊中舍利使吞  
將欲荷如來之菩  
寺照律師稟持犯於

以就 遠業然蒙  
交照尤厚故吐不諱之言必深寤也  
本欲獲往而慮又恐恐中反更  
撓亂進退不皇惟万  
實懷毋怒都言也不下  
拜

宋黃庭堅書（西紀千五百五年卒）

口腹累安邑我其敢用菓菜煩  
嘉禾願以勿復甘此味免使謝  
利登嶠岷 庭堅彭亨上

宋米芾書(西紀千七百七十年)

沒官以指揮日為始則  
是五月初指揮若玉  
洞乃七月也

宋薛紹彭書

如美善之在道也出者及  
曰之志心字字是也正其  
是也帖以正其類者曰橫書  
且暇字之字也字之字也

元趙孟頫書（西紀一三二二年卒）

以四月辛酉其  
城距祖塋五里  
公性開疎與人



明董其昌書（西紀一六三六年卒）

反瑜往帝及治粟津關有奸商索稅國賦  
藩伯將峻絕之貽書俾秉情法之平宮端  
予寧歸省會藩伯有封疆之役時  
哲皇帝御世笑太泚人色真憂趣宮端裝入

明王鐸書（西紀二六五二年卒）

芙蓉閣下會千官  
紫禁朱櫻出上蘭  
總是寢園初薦后  
非關御苑鳥銜殘



清劉墉書（西紀一八〇四年辛）

唐張藻善畫松石清潤可  
愛嘗以手握護管一時齊下  
一为生枝一为枯枝生枝必  
潤含春澤枯枝则乾裂

清鄧石如書(西紀一八〇五年段)

懷哀屬不展  
雲山四面合  
竹樹零花逕

皇朝僧空海書風信帖(西紀八三五年寂)

披過此法期披雲  
因過此法期披雲  
釋迦照狀上

九月十三日

皇朝傳管原道真書(西紀九〇三年薨)

秋潭水鏡  
宮相為  
臣妾不敢  
照作  
新人之呼  
知子鏡  
我

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

皇朝小野道風書白樂天詩(西紀九六六年辛)

見西  
以人  
者  
様  
好  
境  
石  
知  
門

皇朝藤原佐理消息(西紀九九八年辛)

皇朝藤原佐理消息(西紀九九八年辛)  
皇朝藤原佐理消息(西紀九九八年辛)  
皇朝藤原佐理消息(西紀九九八年辛)

皇朝藤原佐理消息(西紀九九八年辛)  
皇朝藤原佐理消息(西紀九九八年辛)  
皇朝藤原佐理消息(西紀九九八年辛)

Handwritten calligraphy in vertical columns, likely a signature or title, possibly reading '極口勇'.

明治四十五年三月三日印刷  
明治四十五年三月七日發行

碎碼法帖談  
正價金壹圓五拾錢

著者權所有

著者 樋口 勇

東京市神田區雉子町三十二番地

發行者 鶴田 久作

東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷者 中島 藤太郎

東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所 神田印刷所

發行所

東京市神田區雉子町三十二番地

黄社

(振替口座第七九九五番)



玄黃社發行書目

玄黃社發行書目

玄黃社發行書目







早稲田大學 慶應大學 眞宗大學 講師 戸川秋骨先生譯 (三版)

# エマーソン論文集

上 卷  
總クローズ美本  
正價壹圓四拾錢  
郵税拾四錢

近代に於ける最も幽玄にして又最も健全なる思想家はエマーソンなり。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁に、句々みな座右の銘とするに足る。現時吾が思想界の急調亂雜を極むるに際して、一代の人心に慰安と指導とを與ふるもの、實に本書の如きを措きて又何物をか求むべき。本書の譯文又精確、忠實と懇切とを盡し、恰も原作に接するの感あらむ。苟も思想界の事に留意するもの必ず一讀すべき也。

- 次 目
- ◎歴史論
  - ◎自恃論
  - ◎報償論
  - ◎靈法論
  - ◎戀愛論
  - ◎友情論
  - ◎細慮論
  - ◎勇壯論
  - ◎大靈論
  - ◎圓環論
  - ◎智力論
  - ◎藝術論

慶應大學講師 戸川秋骨先生譯 (再版)

# エマーソン論文集

下 卷  
總クローズ  
金字入高雅美本  
正價一圓二十錢  
郵税十二錢

●本書上卷に對する國民新聞徳富主筆の「東京だより」  
「……戸川君の英文を讀むの精確にして、其の筆鋒の流暢なるは江湖既に定評あり、記者は君が此至難の業に向つて、着手したる大膽に驚くよりも、其の讀者を惠被するの鮮少なからざるを欣賀せずんばあらず……」

- 次 目
- ◎詩人論
  - ◎經驗論
  - ◎人格論
  - ◎作法論
  - ◎進物論
  - ◎自然論
  - ◎政治論
  - ◎名目論及實  
在論
  - ◎改革論

# 和譯漢文叢書

原文の一字を換へずして明瞭なる假名交り文に書き下し、且つ故事熟語及稍難解の句には皆懇切明瞭なる註解を挿入したるものなり。

### 第一編 田岡嶺雲先生譯註

第 一 田岡嶺雲先生譯註 **和譯老子莊子** 四六版美本 正價 金壹圓貳錢 郵税 金拾貳錢

### 第二編 田岡嶺雲先生譯註

第 二 田岡嶺雲先生譯註 **和譯韓非子** 四六版美本 正價 金壹圓貳拾錢 郵税 金拾貳錢

### 第三編 田岡嶺雲先生譯註

第 三 田岡嶺雲先生譯註 **和譯戰國策** 四六版美本 正價 金壹圓貳拾錢 郵税 金拾貳錢

### 第四編 田岡嶺雲先生譯註

第 四 田岡嶺雲先生譯註 **和譯荀子** 四六版美本 正價 金壹圓 郵税 金拾 錢圓

荀子は孔孟と相並んで亦儒教の一大オニソリナリ也。而して其性惡論は正に近世の西洋倫理説と一致す、本書依例釋文編註釋明瞭の外に、卷頭に四十頁に渉る荀子評論を掲ぐ、荀子を中心として縱横に支那思想を論破する者、是れ一部の先秦哲學小史なり、履按せられたる支那思想史なり。

### 第五編第六編 田岡嶺雲先生譯註

第 五 田岡嶺雲先生譯註 **和譯史記列傳** 上下 四六版美本 正價各金壹圓貳拾錢 郵税各金拾貳錢

### 第七編 田岡嶺雲先生譯註

第 七 田岡嶺雲先生譯註 **和譯七書** 附 鬼谷子 四六版美本 正價 金壹圓 郵税 金拾 錢圓

### 第八編 田岡嶺雲先生譯註

第 八 田岡嶺雲先生譯註 **和譯淮南子** 四六版美本 正價 金壹圓貳拾錢 郵税 金拾貳錢

### 第九編 田岡嶺雲先生譯註

第 九 田岡嶺雲先生譯註 **和譯墨子列子** 四六版美本 正價 金壹圓拾錢 郵税 金拾貳錢

### 續刊 和譯春秋左傳 上下二册

漢文和譯書愈々出で、益々醜を加ふるは偶々以て嶺雲氏の美を發揮するに似たり。眞に漢文和譯書中の魁とすべし。

### 和譯東萊博議 一册

漢文和譯書愈々出で、益々醜を加ふるは偶々以て嶺雲氏の美を發揮するに似たり。眞に漢文和譯書中の魁とすべし。

備内

此篇、人臣固より信す可からず、其妻子も論頼む可らざるを説く。

人主の思は、人を信するにあり、人を信すれば、即ち人に制せらる。人臣の其君に於けるは、骨肉の親みあるにあらざるなり、勢に縛せられて事へざるを得ざるなり。故に人臣たる者は、其君の心を窺覘ウカガヒして須臾も之れ休むことなし、而も人主は怠傲して其上に處る、此れ世に君を劫し主を弑するある所以なり。人の主となりて大に其子を信すれば、則ち姦臣は子に乘じて以て其私を成すことを得。故に李兌は趙王の傅となりて主父武靈王を餓えしめき。人の主となりて大に其妻を信すれば、則ち姦臣妻に乘じて以て其私を成すことを得。故に優施俳優名は麗姫晉ノ獻公に傅となり、申生太子を殺して奚齊麗姫ノ子を立てぬ。夫れ妻の近きと、子の親きとを以てして、而も猶ほ信すべからずんば、則ち其の餘は信すべき者無けん。

且つ萬乗の主、千乗の君の、ハ后妃夫人、適子の太子たる者ハ、或は其君の蚤く死せんことを欲する者あり。何を以て其然るを知る、夫れ妻は骨肉の恩あるにあらざるなり、愛すれば則ち親み、愛せざれば則ち疏し。語に曰く、其母、好愛せらるれば其子抱かると。然らば則ち之が反對たれば、其母悪まるれば其子釋てられん。丈夫、五十にして色を好むこと未だ解けざるに、婦人は年三十にして美色衰ふ、衰美の婦人を以て、好色の丈夫に事ふ、則ち身疏賤せられて、其子の主とならざるかを疑ふ。此れ后妃夫人の其君の死を冀ふ所以なり。

唯母、后となりて子、主たれば、則ち令の行はれざることなく、禁の止まざることなし。男女の樂み、先君先代ノ時より減せずして、萬乗を擅にして疑はれず。此れ酖毒チンドク扼味暗殺の用ひらる、所以なり。故に挑左春秋名に曰く、人主の疾みて死する者、半に處る能はず半以上殺と。人主此理知らざれば則ち亂、資多し賄根多。故に曰く、君の死を利とする者衆ければ、則ち人主危しと。故に王良御者名の馬を愛し、越王勾踐の人を愛せ

田岡嶺雲先生譯註

(再版)

# 和譯維摩經

附 和譯般若心經

總クローズ  
金文字入  
全一冊  
正價金七拾錢  
郵税金八錢

佛經四萬八千卷、就中當に方外緇衣の人に重んぜらるゝのみならず、亦其所幽妙と其文古奥とを古より詩人文人の間に喜ばるゝもの、維摩及般若心經の右に出づる者なし、今此二書をとりて逐字譯を施し且つ簡明親切なる挿註を加へ、別に卷末に原文をも添へて一冊となしたる者即ち此書なり、佛敎の眞諦を味はんとするもの及び苟くも文章に志ある者は一本を座右に備へ明窓の下、淨几の上、爽晨靜夜香を焚いて之を讀め。

エマーソン原著  
高橋五郎先生譯

(再版)

# 處世論

總クローズ美本  
全一冊  
正價圓貳拾錢  
郵税拾貳錢

- 次目
- ◎運命。
  - ◎勢力。
  - ◎富有。
  - ◎修養。
  - ◎禮儀。
  - ◎禮拜。
  - ◎餘論。
  - ◎美。
  - ◎迷想。

米文豪エマーソンの「コンダクト、オプ、ワイフ」を翻譯する所前、オプ、ワイフ」を翻譯する所前、達人の達觀せる處世哲學にして凡て九深邃なる思想なる想像富膽を加へ、に有り觸れたる成功談の如く淺薄なるものにあらず、譯筆又精嚴にして其跌宕奧妙なる文章思想を解釋す深高なる處世經とて何人も一國民新聞評

笛川漁郎譯

(再版)

# 處世交際法

袖珍總クローヌ  
全一冊箱入  
正價金七拾錢  
郵税八錢

## 批評

「原書は獨逸クニツゲ氏の著にして版を重ねること數百、現に同國中流以上の家庭にしてその一本を備へざるは無き程に行はれ居る一種の社交經濟の名著にして其の由、譯は鶴田笛川氏なるべく平易なれども急所を捉へ一の贅語なく讀みて有興味にして又有益也。斯る書類中の最も傑出したるものなるべし」(報知新聞評)。「交際法の眞諦を説破し得て極めて妙。本書を精讀せば如何なる交際下手の人と雖も處世の要道に通曉すること無礙自在なるべし」(大阪毎日新聞評)。「社交の要訣を説くこと到れり盡せり」(東京毎日新聞評)。「翻譯も流暢自在にして興味深し」(都新聞評)。「用意周到にして譯文も亦明快也」(國民新聞評)。「且つ此類の書のうちで最も丁寧詳密なるものと云つて可也」(やまと新聞評)。

笛川漁郎譯

(七版)

# 社交談話法

袖珍總クローヌ  
全一冊  
正價金四拾錢  
郵税四錢

## 目次

- ◎第一章 寧ろ傾聴者たれ
- ◎第二章 相手の信用を獲るに就て
- ◎第三章 國刺冷罵戲弄に就て
- ◎第四章 非難、攻撃に就て
- ◎第五章 世辭に就て
- ◎第六章 虛榮心に就て
- ◎第七章 懇懇に就て
- ◎第八章 物語奇聞及地口に就て
- ◎第九章 質問に就て
- ◎第十章 無遠慮厚顔に就て
- ◎第十一章 議論に就て
- ◎第十二章 婦人との談話に就て
- ◎第十三章 避くべき話題に就て
- ◎第十四章 奇言に就て
- ◎第十五章 小自我心小犧牲に就て
- ◎第十六章 晩餐會上の談話に就て
- ◎第十七章 沈黙の人、怯懦、及其矯正に就て
- ◎第十八章 用語に就て

▲東朝日新聞評「……社交的談話法 秘訣を網羅せり」國民新聞評「……を剷切犀利にして譯文亦極めて明快、全編十八章皆有益有興味之文字……」報知新聞評「……所說剴切 痛快にして 此種著書 白眉す」

文學士 生田長江先生譯

(再版)

# ニイチエ語録

袖珍總クローヌ  
全一冊  
紙數四百五十頁  
正價七十錢  
郵税八錢

▲未だニイチエを知らずして、近代の思潮を云々するは、未だ聖書を讀まずして、基督教を談するの輕佻に比すべきか。

▲ニイチエは屢々思想の魔王を以て目せらる。猛然たる其獅子吼は流俗の群獸をして戰慄色を失はしむるに足るものあり。

▲本書は特に其筆鋒警拔奇鋒を極むるもの、短言數千項を抄録し、以て此巨人の全面目を一視野の間に收めたり。

●萬朝報批評 「譯者既にニイチエに親むこと十年、遂に彼の一代の大著ツアラッストラを譯するに至りしが、別に渠が短句の奇警にして高遠なるものを諸書に拾ふて此書を成す、その文莊重謹嚴、一點一畫荷もせず、小冊子よく大哲の面影を傳へて躍如たるものあり、蓋し此譯者にして始めて生み得べきもの。」

文學士 生田長江先生譯

(新刊)

# トルストイ語録

袖珍總クローヌ  
全一冊  
紙數四百三十頁  
正價金七十錢  
郵税金八錢

●東京朝日新聞評 「思想家としてのトルストイが如何なる人物なるかを知らむと欲するものは此書を讀まざるべからず、彼の思想は既に露西亞を動かせり全歐に影響せり吾人東洋人亦豈彼の思想に負ふ所なからむや。」

●東京日々新聞評 「疊きにニイチエ語録を譯して好評噴々たりし著者今又本書を譯了せり、本書はトルストイの著書中より抄録せる短言寸句數千項を輯めたるものにして其文莊重謹嚴奇警高遠なる以て偉人の面影を覗ふべし。」

マクス、オーレル著  
 藤井白雲子譯  
 德富蘆花先生跋  
 (三版)

# 「女」殿 下

裝訂雅美  
 全壹冊  
 正價六拾錢  
 郵税八錢

## ◀ 次 目 ▶

◎解し難き女性  
 ◎結婚せざる男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ  
 ◎結婚せんとする男子へ

◎女性の興ふる感化  
 ◎佛蘭西の好な女  
 ◎世界第一の美人  
 ◎女性に男子の如何なる點を好むか  
 ◎選り取りの美人  
 ◎英吉利の好な女  
 ◎佛蘭西の好な女  
 ◎佛蘭西の好な女  
 ◎佛蘭西の好な女  
 ◎佛蘭西の好な女  
 ◎佛蘭西の好な女  
 ◎佛蘭西の好な女

◎老處女  
 ◎寡婦の選法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法  
 ◎夫の操縦法

### ●外 十二 章

▲東京朝日新聞評「……世界の婦人研究中最も面白く最も意味深き者にて世に行はるる譯書三四様あり中にも本書はオーソリチーたるもの也……」



